

しょう ちょう
小 網 町

壬申の乱に兵馬が集う

大和の国中を東西に貫く古代幹線道「横大路」と、同じく南北に走る「旧太子道」が市の中心部で交差する一帯を、古くから「小綱」と呼んできました。

現在、小綱（しょうこ）と音読している地名は、かつて金綱（かなつな）から転じて小綱（こつな、こうつな）と訓読していた——の説があります。この説は日本書紀・天武天皇元年条の「金綱の井に屯（いわ）みて散（あか）れる卒（いくさ）を招き聚（あつ）む」という、壬申の乱（じんしんのらん）に関する記録から出たようです。この「鉄の索で水を汲む」金綱の井が当時の小綱付近にあったともいいますから、大変な古い話になります。

伊勢参りなどにぎわった江戸時代前期の明暦・万治（一六五五―六〇）のころ、この地に「新屋敷」と呼ばれた傾城（遊郭）のあったことや、大勢の「かご細工職」が住みつき、高級竹ざる「小綱いっかき」の製造が最近まで盛んだったことも、いまや人びとの記憶から消え去ろうとしています。

また、元は真言宗高野山派仏起山普賢寺の本堂で、明治期の廃仏毀釈によって同寺が廃絶したことで真宗興止派正蓮寺の管理に属することとなった、全国的にも有名な大日如来坐像を安置する大日堂（いずれも重要文化財）も、同町にあります。